

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 9
2013.10

書物との出会い、 あるいは、記者にならなかった理由

のっけから恥をさらすようで気が引けるが、私は大学には計6年間、在籍した。ただし、学内滞在時間、いや教室滞在時間の総計は、昨今の大学生平均のせいぜい1年分くらいではなかったかと思う。要するに、あまり大学には行かず、行っても授業には出なかったということである。入学後数ヶ月で、わが大学の各学部自治会は、キャンパスへの機動隊導入に抗議して、無期限ストライキに突入していった。今の学生諸君には、学生が「ストライキ」をするという発想自体が、蛸が自分の足を食っているようなもので、何とも不可思議に思われることだろう。この影響で、3年生の4月からだったはずの専門課程への進学は、半年以上ずれ込むこととなった。

この進学までの2年半ほど、図書館を利用した記憶はほとんどない。あまり大学に行かなかったことに加えて、本は借りて読むものではないと考え、アルバイト代をつぎ込んで、ほしい本は買って読んだからである。当時のわが国の大学図書館は総じて、開架式と閉架式と読書スペースが漫然と配置されただけの建物で、落ち着いて本を読んだり、思索に耽ったりするには不向きの空間であった。欧米に倣って、わが国の大学図書館が、機能的かつ快適な読書空間に変容していくのは、1980年代以降のことではなかったかと思う。

本を読むのにもっぱら利用したのは、キャンパス周辺や通学圏内にある名曲喫茶であった。これまた今の大学生にはピンときにくい代物だろうが、端的に言えば、クラシック音楽が流れていて、好きな曲をリクエストできる、会話厳禁で一人掛けの「鑑賞席」のコーナーが設置されている喫茶店である。当時、名曲喫茶の「鑑賞席」は、誰に頼まれたわけでもないのに、人生の苦悩を勝手に背負い込んだような深刻な顔で、難解そうな書物に読み耽る学生に満ち満ちていた。新宿「ランブル」、高田馬場「あらえびす」、渋谷「田園」、渋谷「野バラ」、御茶ノ水「ウィーン」、本郷「麦」などの名曲喫茶は、当時の私にとって、教室であり図書室でもあった。

国際関係学部 国際教養学科
教授 井上 健



1年遅れで専門課程に進学し、覚束ないフランス語で読んだランボーの詩集に魅了され、仏文科に籍をおいてはみたものの、相変わらず、学内滞在時間をミニマムにとどめて、街を歩いては喫茶店で本を読む日々が続いた。そんな大学5年目の夏、内定した就職先は、受信料なる不届きなものを一方的に徴収する「国営」放送局である。その頃には、自身のフランス語力にとうに見切りを付けて、英文科に籍をおき、エドガー・アラン・ポーで卒論を書こうとしていたが、その実、もっぱら心酔していたのは、フランス語以上に心許ないドイツ語力で読みかじっていたリルケ、ゲオルゲ、ホーフマンスタールなどの1870年前後生まれのドイツ、オーストリアの詩人たちであった。

すんなり卒業、就職して放送記者になるつもりだった大学5年目の秋も深まった頃、減多に足を踏み入れぬ総合図書館に赴いて、一冊の原書を探したことがあった。堀辰雄の『風立ちぬ』の終章「死のかげの谷」の、祈りつつ、語りかけるような文体に惹かれ、そこで引用されているリルケの詩集『鎮魂曲（レクイエム）』を、どうしても原文で読んでみたくなったのである。当時は図書の検索は、もちろんカードによる。カードには閉架と記されており、閉架書庫は学部学生立ち入り禁止だったので、書庫前のカウンターで請求すると、さして問を



おかず目の前に置かれたのは、インゼル版の絵本のように美しい装丁の詩集であった。一刻も早く頁を繰りたい思いを抑えつつ帰宅して、借り出した『レクイエム』を子細に眺めてみて驚いた。その詩集は書名

から本文まで、いわゆる亀甲文字(ヒゲ文字)で書かれていたのである。おまけに表紙の見返しには「森鷗外文庫」という蔵書印がしかと押されていた。

ろくにドイツ語も読めない、授業もさぼってばかりの学生が、まさしく猫に小判とも言うべき、森鷗外の蔵書を借り出してしまったのは、偶然のいたずら、何かの因縁と言うしかない。亀甲文字がすぐに簡単に読めるわけもなく、そして何より、森鷗外の蔵書をひもどくのが畏れ多く、リルケ『レクイエム』は2日後、謹んで返却することとした。その代わりに珍しく図書館から借りだしてきた和書が、森鷗外の翻訳小説集『諸国物語』であった。森鷗外とリルケとの関係が知りたくなり、全集をばらばら眺めていたら、この『諸国物語』に、卒論で手がけていたポーの森鷗外訳が三編含まれていることを知ったからである。ポーは本国アメリカに先んじて、フランスやヨーロッパで評価され、各国語に翻訳され、世界中で今日に至るまで愛読されている作家である。独訳を介して鷗外によって日本語に移されたポーは、いかなる相貌をおびたポーなのであろうか。知識・関心がこうして芽づる式に広がっていくのは面白いものだと、そのときふと思った。

この『レクイエム』、森鷗外文庫体験がきっかけで進路変更をしたなどと言えば、あまりにきれいな事に、できすぎた話になってしまうだろう。だが、これが一冊の書物によって導かれた出会いの瞬間であったこと、そして、年の瀬が迫るにつれ、事実を追いき求め、状況に強いられて走り回る、記者という仕事に就くことに対するためらいが高まっていたことだけは確かである。かくして、単位を落として卒業できないことを口実に、「国営」放送局には断りを入れ、6年目の学生生活を送り、大学院を受験する仕儀となった。大学院が不合格なら、どこかに就職しなくてはならないので、学生生活6年目の夏、ある新聞社を受験して内定をもらった。そのときの最終面接を仕切っていた部長は、その後、社主として君臨し、確信犯的暴言癖で名高い。この部長に面接の最後に、念のため、家で購読している新聞名を教えろと言われて、正直に「朝日です」と答えて苦笑されたことなど懐かしく思い出すが、この話は何度か書いたことがあるので、これくらいにしておく。

大学院の進学先は、人文科学研究科比較文学比較文化専攻で、修士論文では、エドガー・アラン・ポーを再び取り上げ、その日本文学に与えた影響のほどを検証した。森鷗外のポー翻訳についても、一節を設けて触れたことは言うまでもない。比較文学比較文化は、戦後できたディシプリンである地域研究や国際関係論のコースの上に乗っている専攻で、院、

学部共用の図書室は、古今東西の選りすぐりの書を、広く、バランスよく集め、配置した、学際研究の拠点に相応しい、機動力に富んだ知の空間であった。この図書室を利用するようになって、図書館の価値を決めるのは蔵書数だけではないことがよくわかった。

ネットで情報検索できる今、探索する目標に到達する速度と精度は、二桁は、いや事に依ったら三桁は上昇した。その代償として失われたものがあるとすれば、それは直線距離で邁進するのではなく、脇見をし、寄り道をし、たっぷり時間をかけて、目的地までたどり着く楽しみのようなものであろう。そうした迂回が、思いがけない出会いが、視野や見聞を広げ、ひいては、新たな研究テーマの発見につながっていく。

大学教員になってからお世話になった図書館の思い出も尽きない。最初に勤めた女子大の英文科では、大学院生用の基本研究文献の購入係を担当した。自分の日常とは2桁以上も異なる金額を任されて、ほとんど、アラブ石油王気分であった。その上、院生そっちのけで、ひたすら自分のほしい本ばかり買い漁っていたのだから、まさに、泥棒に金庫番を任せたとようなものである。一般客には無愛想なことでも有名な、神保町のK書店に購入に赴いたときなど、ドアを押し開けるやいなや、作り笑い、いや満面の笑みで迎えられ、お茶まで出てきたのには少々驚いた。

次の職場たる神戸大学の各学部の建物は、港を見下ろす南向き斜面に点在している。急坂だらけで、上り下りが辛くなったことで、定年が近いことを知らされる「定年坂」なるものまであった。文学関係の図書は、当然のごとく、教養部、文学部、教育学部に分かれて所蔵されていて、本を読むこと、探すことは、事実上、山登りと同義であった。この大学で私は、本を読むこと、研究することが、健康増進と両立しうることを学んだ。その次の職場、京都大学では、大小様々な収納空間に、喉から手が出るような貴重な書が無造作に山積みしてあった。書物を手に取り、コピーをする度に、それら重要文献はぼろぼろと崩れていく。この大学で私は、書物を渉猟し、読み、調べるとは、書物を消費することであることを学んだ。

その次の職場、東京工業大学は、図書購入に関しては、万事にきわめて鷹揚な大学であった。高額の研究機器に較べれば、書籍代などものの数ではなかったというのが実態に近い。この大学で私は、「消耗」していることを理由に、高額の本を「消耗品」として購入するという裏技を駆使して、今日の古書コレクションの礎を築いた。その次の職場、東京大学教養学部も含めて、書物との運命的な出会いにまつわる想いは枚挙に暇がないし、在外研究の機会が与えられたときに日参したハーバード大学の稀覯本図書室ホートン・ライブラリーなど、書きたいことはまだまだあるが、紙幅が尽きたのでこのあたりで筆をおくこととする。

● ESSAY

フィールドワーカーにとっての図書館

国際総合政策学科 横田 貴之

カイロでのフィールドワーク

私の研究対象は、現代中東最大のイスラーム主義運動であるムスリム同胞団だ。十数年前にエジプトの首都カイロを初めて訪れて以来、ずっとこの組織を追っている。最近では、同胞団出身のムルシー大統領がエジプト軍のクーデタによって失脚するなど、話題に事欠かない組織である。

本を読むよりも足で調べる——大学院生だった私はそのように考えていた。もちろん、カイロ市内には多数の図書館がある。しかし、当時はムバーラク政権下で、同胞団は非合法状態に置かれていた。そのため、同胞団が発行する資料はエジプト国内の図書館にはほとんど収められておらず、同胞団メンバーや関連組織を訪問して直接入手するしかなかった。

刊行された図書よりもフィールドワーク(現地調査)を研究の中心に据えていた私にとって、図書館は縁遠い存在であった。

はじめの図書館訪問

エジプトで図書館に足を運ぶことのなかった私が、図書館を訪れるようになった理由は、エジプトの苛烈な気候であった。夏のエジプトは日中の気温が40℃を軽く超え、暴力的な日差しの下では30分と歩けない。

ある日、次のインタビューまで2時間ほど空いてしまった。手元の地図を見ると、研究仲間がよく口にするダール・アル＝クトゥブ(エジプト国立図書館)が近くにあった。そのまま炎天下

で立つことに危機感を覚えた私は、涼を求めてその図書館へ向かった。パスポートを預けて入館すると、大量の刊行書籍、雑誌、写本があった。なお、マムルーク朝やオスマン朝の時代の古文書にあたる写本はマイクロ化されている。

実際、私の研究対象とする同胞団に関連する資料を見つけることはできなかった。しかし、その膨大な所蔵に私は圧倒され、図書館は凄いと改めて感じた。もちろん、涼を求めるという目的も果たせた。以降、私は調査先近くに図書館があれば、可能な限り足を運ぶようにしている。

アレクサンドリア図書館

エジプトには、地中海に面したアレクサンドリアという美しい街がある。カイロの雑踏を離れたい時、私はこの街を訪れ、海をぼんやりと眺めたものだ。

かつてアレクサンドリアには、70万巻の蔵書を誇る地中海世界最大の図書館があった。ヘレニズム文化の中心地として栄えたが、後に火災や略奪で失われた。2001年、エジプト政府とユネスコのプロジェクトにより、この図書館が現代に復活した。2003年に私が訪れた際は、書架に空きが目立っていたが、スタッフは800万冊を目指すと思ひ荒く語っていた。

その後のエジプトでは革命や政情不安が続いており、図書館周辺でも衝突が頻発している。エジプトの新しい国づくりとともに、かの国の図書館も順調に発展して欲しいと願っている。

● ESSAY

図書館との付き合い方

ビジネス教養学科 川戸 秀昭

私が今まで生きてきた中で最も利用した図書館がある。利用したというより、利用せざるを得なかったというのが正確かもしれないが、その図書館は英国のCoventry市にあるWarwick大学の図書館である。1999年に同大学の大学院へ進学した私を待ち受けていたのは、毎週課されるリーディングリストというとても量読書の読書であった。大学院ということで週に3コマの授業を受講すればよいのであるが、それぞれの授業で指定されているリーディングリストに載っている本は10冊程度。計30冊もの洋書(全てではなく指定された箇所)を読んでから授業に臨まなければならない。それらを理解せずに授業を受ければ、ディスカッション中心の内容についていけない。外国人留学生にとっては非常に困難なハードルである。そのため、毎日のように図書館に通い、指定された本を探し、借りるかコピーを取ることとなる。もちろん多数の学部を有する大学であるため、利用する学生数も必然的に多く、コピーの順番待ちに時間を取られることもしばしばであった。図書館自体は近代的で利用しやすくなっており、学生証に電子マネー機能が搭載されているため、コピーの支払いも、学生証を用いるシステムである。図書館は

24時間開放されており、時間を気にせずに閲覧、勉強が可能となっていた。もちろん借りた本を持ち帰って読むこともできる。当時の私は借りた本を寮の自室に持ち帰り、肅々とノルマをこなす日々を送っていたが、何分読むのが遅いのと難しい文章を読むと眠くなってしまうという体質から、ベッドで読んでいるうちにいつの間にか眠りについてしまうという生活を繰り返していた。

このように書くとはひどくつまらない生活であったかのように思われるかもしれないが、英国での学生生活は大変有意義で、私の人生を大きく変えたものでもあった。勉強も遊びも精一杯楽しむ学生たちに影響を受け、私も一心不乱に遊び、一所懸命に学んだ。野球部に所属して汗を流したり、一緒にヨーロッパ旅行に出かけたり、徹夜で語り合ったりもしたが、そこで得た国籍の異なる友人達は今でも大切な友人達であり、これからもそうであり続けるだろう。学生の皆さんには今、この貴重な時間を悔いの無いように全力で過ごしてもらいたい。その貴重な時間の一部を図書館で過ごすことも頭の片隅にでも入れてもらえれば幸いである。

● WRITTEN BOOKS

刊行物紹介



比較生活文化考

西田 司／島岡 宏 編 [ナカニシヤ出版]

「生活文化」に興味を持つ人は多いと思います。また、亀井俊介 東京大学名誉教授が、この比較文化・比較文学研究の第一人者であることもよく知られています。

『比較生活文化考』には、亀井先生の「巻頭言に代えて」という文章が載っていますが、本書が日本比較生活文化学会の

有志によるものであるため、本学会初代会長の亀井先生に、学会初の出版本の始めの文章を担っていただきました。本学会は、様々な分野の人が集まり、「生活文化」について研究しています。この現象を亀井先生は巻頭言で、様々な分野から「触手を伸ばしている」と表現されました。たいへん明確な表現で、本学会あるいは本書を説明されています。つまり本書から、多岐にわたる学問領域が1つの方向に向かって伸びている様が、見て取れるからです。

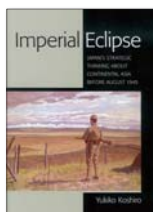
「生活文化」に興味を持つ人、あるいは、学問が「触手を伸ばしている」様に興味のある人に、ぜひ一読をすすめる次第です。

イギリス重商主義とウィリアム・ペティ
—近代の租税論の先駆

吉田 克己 著 [八千代出版]

イギリス史において、17世紀は、国内的にも国際的にも、また経済面においても政治面においても、激動期・転換期であった。国家財政についていえば、それまでの国家収入体系が全面的に崩壊し、新たな租税体系の確立が喫緊の課題であった。こうした中であって、ウィリアム・ペティは、当時のイギリスが置かれていた諸状況と動向とを踏まえて、科学的方法に基づいて近代性に根ざした体系的・包括的な租税論を展開し、あるべき税制の方向を示した。今日の租税論の基礎は、まさにペティによって築かれたといつてよい。

本書は、17世紀イギリスの租税環境にも触れつつ、ペティの著作に直接取り組むことを通じて、かれによって展開された租税論の構造と特質及びその意義を明らかにしている。



Imperial Eclipse — Japan's Strategic Thinking about Continental Asia before August 1945

小代 有希子 著 [Cornell University Press: Studies of the Weatherhead East Asian Institute, Columbia University]

第二次世界大戦末期、日本は狂信的に戦い続けたが原爆投下によってようやく降伏した、というのは神話にすぎない。

日本政府は、ソ連が日米和平交渉を取り持ってくれると最後まで期待した、というのも「東京裁判」が作り出した神話だ。

この著は、戦争末期に日本人が抱いた世界観を掘り起こし「終戦神話」の修正を迫る。軍・政治・外交指導者や知識人たちは米ソの覇権争いに注目し、大日本帝国崩壊後の中国と朝鮮に介入してくることを予測し、そうした東アジア情勢の中で「敗戦日本」はどう生き延び復活できるかを考えた。しかし戦後冷戦構造下アメリカの同盟国として再起する過程で、この「終戦戦略」は隠蔽され、中国、朝鮮、そしてソ連との駆け引きは忘れ去られた。日本のこうした終戦考察を明らかにすることで、日本人が70年以上忘れていた記憶を呼びさまし、新しい「日本の戦争と植民地帝国の歴史」を描き直すきっかけをこの著が提供することを期待したい。

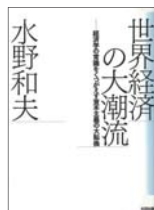


はじめての科学史

山中 康資 著 [共立出版]

科学がどのような学問かを知るためには、その歴史をたどることが最も理解しやすい方法であり、必要なことである。ところが、科学的知識は、歴史的に積み重ねられてきたので、その量は膨大で、科学の進歩とともに分野が細分化されてきた。そのため、科学の歴史、すなわち科学史のどのようなところに重点を置いて、どのような筋道に従って学ぼうとするのがとても重要である。

本書は、古代ギリシャ時代から20世紀前半までの科学の進歩を学ぶ「科学概論」および「科学史」の入門書である。その内容は、古代ギリシャ時代以降順番に、時代ごとの科学の内容、科学的トピックス、その時代に活躍した科学者の紹介と業績等について述べている。



世界経済の大潮流

—経済学の常識をくつがえす資本主義の大転換

水野 和夫 著 [太田出版]

本書は、終わりのなき危機からどう脱出するのかというテーマを中心に、出口の見えないデフレ、相次ぐ国家財政破綻、9・11(米国同時多発テロ)、9・15(リーマンショック)、3・11(東日本大震災と東京電力福島第一原発事故)など連続する危機など、資本主義のかつてない変容を解き明かそうとした。資本主義の本質を資本の自己増殖過程にとらえると、利率ゼロ(利潤率ゼロと概ね等しい)の世界では資本蓄積がもはや出来なくなっており、資本主義が危機に陥っているといえよう。日本の10年国債利回りは1997年以降、ドイツでは2011年以降2.0%以下である。「金利の歴史」5000年のなかで17世紀初頭のイタリア・ジェノバ以来の利率革命が起きているため、現在を「長い16世紀」と対比することで、資本主義の将来予測を試みた。



フロベールの聖〈領域〉

—『三つの物語』を読む

橋本 由紀子 著 [彩流社]

脱宗教化が進んだとされる19世紀フランスにおいても、宗教(キリスト教)は人々の心に大きな影響を与え続けていた。本書は、自らは信仰を持たずに人間の宗教感情を注視し続けた、フロベール(1821-1880)という作家の宗教観を明らかにし、最晩年の短編集『三つの物語』に記された〈聖〉なる世界を読み解こうとする試みである。

フロベールが求めた聖なる領域は、完全に地上の世俗性にあるわけでも天上の超越性の内にあるわけでもない。人物たちが求める崇高な世界は、たとえば現実と想像世界、地上と天上の狭間という、二つの世界の境界が不分明になる領域に求められる。人間の内なる「聖域」は、同時に神的であり悪魔的であるものとして現れる。19世紀フランス、中世ヨーロッパ、古代オリエントに広がる三つの彩り豊かな世界に、フロベール独自の宗教世界を見る。



アメリカで歓迎された岩倉使節団

—新聞報道による訪問都市での歓待

佐藤 聡彦 著 [なでしこ出版]

この本では岩倉使節団のアメリカにおける歓待状況を、現地発行の新聞、特にシカゴ・トリビューンを中心に利用しながら、主要な訪問都市での状況を訪問側だけでなく、受け入れ側からも概観した。この岩倉使節団だけではなく、人々が異文化に接した時には、相違点を見出すことにより違和感や親近感を覚え、その滞在が長期に渡れば疎外感も感じるようになる。また個人的な立場と国家を代表した立場では、それらの見方も授受双方において異なる。利用した資料ではこのような見解が入り乱れているが、本書では簡便な考察に止めた。さらに比較のため、江戸幕府による万延元年遣米使節団についても少し含めた。訪問側と受け入れ側の期待と不安は今も昔も変わらないものである。もし本書に掲げた都市を訪れる、または他国の都市を訪れることがあるなら、ぜひその地の歴史について学んだ後に異文化を体験することを勧める。

所蔵資料紹介

日本におけるアダム・スミス蔵書の行方

『1688年から1751年に渡るイギリスの国債及び租税史』

国際総合政策学科 大淵 三洋

アダム・スミス(Adam Smith)は、生涯を通じて、*Theory of Moral Sentiments*と*Wealth of Nations*の2冊しか著書を公刊していない。しかし、アダム・スミスは、*Wealth of Nations*発刊後もさらに2冊の著作を準備していたといわれる。その一は、文学・哲学・詩および修辞学の各部門すべてを通じての哲学史のようなものであって、その二は、法律および政治の理論と歴史の一種である。両者の材料は沢山に蒐集されており、しかも両者のある部分はかなりの秩序に整理されていた。しかし、その後、アダム・スミスは、母校グラスゴー大学の総長に就任し、雑務に追われ、*Wealth of Nations*に続く著作が出版されることはなかった。

私は、アダム・スミスにより公刊された二つの著作と日の目をみることのなかった2冊を著述するために蒐集された蔵書に関して、その行方を追ってみた。

アダム・スミスの死後、彼の約3000冊の蔵書は、弱冠21歳だった従弟のLord Restonに財産とともにすべて相続された。さらに、1819年、彼が死去し、その遺言により、二人の娘に二等分されて受け継がれた。とくに、経済学関係の蔵書は、Mrs.Bannermanが相続し、そして1879年、彼女が亡くなったとき、息子で神学博士のDavid Douglas Bannermanが相続した。彼は、1884年と1894年の2度に分けて、スミスの蔵書をすべてエジンバラ大学のNew Collegeに寄贈している。Lord Reston のもうひとりの娘であるMrs.Cunninghamの相続した蔵書は、1878年、彼女の夫であるW.B.Cunninghamの死後、その一部が夫人の手によってエジンバラで売りに出された。その中のある部分は、Professor Hodgsonによって買われ、その後、彼の死後、未亡人によってこれもエジンバラ大学に寄贈されている。エジンバラで売却されることのなかった蔵書は、カニンガム夫人の死後、息子の博物学者であるR.O.Cunninghamに引き継がれ、彼は、自己の職場であったBelfastのQueen's Collegeにその一部を寄付した。しかし、1918年、R.O.Cunninghamの死後、スミスの蔵書は、ロンドンの古本屋であるDulau & Co.に売却されてしまった。

幸いな事に、アダム・スミスの蔵書が多く日本に存在している。これは、新渡戸稲造の貢献によるところが大きい。1920年、偶然、ロンドンに滞在中であった彼は、141部、308冊のスミスの蔵書を購入している。

アダム・スミスの蔵書は約3000冊とされる。この蔵書中、アダム・スミスと最も縁の深い大学であったグラスゴー大学は、蔵書の買い取りに際し、新渡戸に先を越されたのが響き、現在の蔵書所有数はわずか20冊にすぎない。

新渡戸稲造の買い取ったアダム・スミスの蔵書は、彼の意を受けて、東京帝国大学経済学部創設祝として、大学に寄付されている。

その後、いくつかの経路を通じて、アダム・スミスの蔵書の入手が試みられ、東京大学以外の他の大学も経済学関係の蔵書を含め購入に成功している。水田 洋編『アダム・スミス蔵書目録』が2000年11月にオックスフォード大学出版より刊行され、スミスの蔵書約3000冊のほとんどの所蔵箇所が明らかにされた。

これによると、2000年時点における日本の各機関に所蔵されているアダム・スミスの蔵書は計162部、363冊である。

日本において、個人所有のものはもはや存在しない。その内訳は、東京大学経済学部が149部、324冊で群を抜いている。これは、前述の新渡戸稲造の貢献によるところが大きい。次いで、日本大学法学部が4部、26冊、日本大学国際関係学部が1部、1冊、日本大学歯科病院1部、1冊、慶応大学が2部、2冊、同志社大学が1部、4冊、京都大学経済学部が1部、1冊、大阪大学が1部、1冊、関東学院大学が1部、1冊、福山大学が1部、1冊を所有している。

この中の1部、1冊が日本大学国際関係学部の所有する「[Gordon,George]『The History of our national debts and taxes from the year MDCLXXXVIII, to the present year MDCCLI.』 London,M.Cooper,[1751-1753]」(『1688年から1751年に渡るイギリスの国債及び租税史』)である。

アダム・スミスは、*Wealth of Nations*の第5編で、資本主義完成期を前にして、著名な租税原則(平等の原則、確実の原則、便宜の原則、最少徴税費の原則)を記述している。また、同書の中において、資金調達のための長期国債発行を痛烈に批判している。こうした租税と国債に関するアダム・スミスの考え方は、生涯一貫していた。それに大きく貢献した蔵書のひとつが、国際関係学部所有の『1688年から1751年に渡るイギリスの国債及び租税史』と推測される。

尚、日本大学はアダム・スミスの蔵書を計6部28冊を所有し、国内の私立大学としては一番多いことを明記しておく。

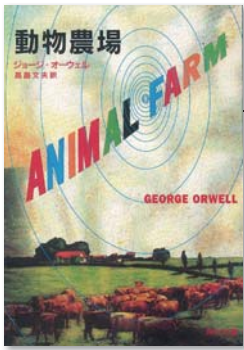


[Gordon,George]『The History of our national debts and taxes from the year MDCLXXXVIII, to the present year MDCCLI.』 London,M.Cooper,[1751-1753]

邦訳 『1688年から1751年に渡るイギリスの国債及び租税史』

推薦図書紹介

● RECOMMENDED BOOKS



動物農場

ジョージ・オーウェル 著 / 高島 文夫 訳 [角川書店]

初めてこの本を読む学生諸君は、電車の中や寝る前など、リラックスして何も考えず、只々活字を追って読み進んでゆけばよい。しかし読み始めると面白くて止まらなくなるので注意が必要である。ストーリー展開の面白さもさることながら、描かれている動物たちが生き生きしており、その動物たちが醸し出す雰囲気から「こんな人いるなあ!」と、思わず友人・知人と比べてしまうだろう。

研究対象として読むならば(事実この作品は多くの研究者にとって「必読の書」なのだが)、オーウェルの特異な生涯を下地として、スターリン独裁体制下のソビエト連邦また共産主義に対する痛烈な批判が込められていることがわかる。そして『動物農場』の次は『1984』を読むことになるであろう。

この本の最大の特徴は「寓話」であること。寓話はその話の中に教訓を含むものである。よって単純に話の筋だけを追っていたとしても、最後には、社会とはどうあるべきか、人間とは何か、などと自分に問いかけ、また考えていることだろう。そして歴史を知っていれば、当時のソビエト連邦、イギリス、ドイツなどと対比させながら読み進んでゆくこともできる。もちろん哲学的考察もできる。

一度読んだら忘れられない本になる。そのストーリーの面白さ、また時代背景と照らし合わせた研究もさることながら、それ以上に自分がそこに何を感じ、何を読み込むかによって、解釈は無限である。

国際総合政策学科 杉本 宏昭



日中対立—習近平の中国をよむ

天児 慧 著 [筑摩書房]

今年3月発足した習近平の中国はどこへ向かおうとしているのか?

日本のみならず世界が注視する中国新政権の行方とその問題、それによって日中関係にどのような影響があるのかを、学生が読んででもすんなり理解できるように、わかりやすく論述している。著者の天児慧氏は早稲田大学大学院太平洋研究科教授・同大アジア太平洋センター所長。現代中国政治の研究者だ。

政権発足からまだ三か月だというのに、日本ではもう180冊を超える習政権の本がある。世界第二位の経済力をバックに「中華民族の偉大な復興」「中国夢」「富強」とたて続けに強硬姿勢を打ち出す習政権を、早く理解したいという焦燥の表れだ。習政権は前体制から4つのジレンマを引き継いでいると著者はいう。

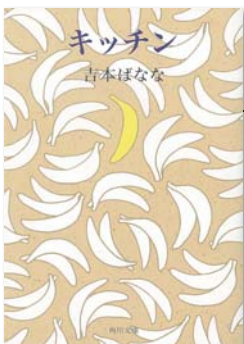
1. 不平等社会(格差)のジレンマ、2. 強硬路線(大国主義思考)のジレンマ、3. 中国特異論と世界普遍主義との差、4. 共産党体制堅持のジレンマだ。いまや大勢力となった五億ともいわれる中間層の権利意識・公平意識をうまく押さえこみ、政治の不安定を避けながら多元化、多様化したニーズに

対応する政治システムを作ることが新政権の急務だ。シンガポール型モデル(国が全面的に管理し経済成長と社会福祉を両立させる)を目指すだろうと著者はみている。

世界第二位となった経済でも難しいかじ取りが待っている。「技術イノベーション」が成功しなければ、安い労働力で中所得国になった中国は「中所得の罠」に陥る。国民の上昇志向、団結を維持する鍵の一つが、「民族の復興」を掲げる強硬姿勢と、誰も反対しない落とし所の「反日」だ。日中関係を考える時、中国の対米と対東南アジア戦略に目をくばり、二国間関係からではなく、アジア、太平洋地域のワクの中で日中関係を考える事がますます重要になってくるという指摘は、日本、フィリピン、ベトナムに向けられた中国の強面をみると、納得できる。

その上で、日本の青年達が中国の複雑な「反日」心理を理解し、多様性を有する八十年代、九十年代生まれの中国人と触れ合う交流をし、現実的で具体的な付き合いを積み上げていくことが、日本に対する誤解を解く古くて新しい道なのだという。著者は学生にそのように語って励ましているのだろう。

国際教養学科 井上 桂子



キッチン

吉本 ばなな 著 [角川書店] ※本学所蔵は福武書店版

「等はいつも小さな鈴をバス入れにつけて、肌身離さず持ち歩いていた。

それはまだ恋ではなかった頃に私がなんの気なしにあげたものだったのに、彼のそばを最後まで離れない運命となった。」

これが『ムーンライト・シャドウ』の冒頭の一節だ。この短編小説は、1988年に刊行され、今では20カ国以上で翻訳されている本書『キッチン』に収められている。

私は『ムーンライト・シャドウ』を「日欧比較文化論」の必読文献に挙げている。「ロマンチック・ラブの系譜と洋の東西」をテーマとするこの科目は、まず、ド・ルー・ジュモン『愛について』を参照し、『トリスタンとイゼル』や『ロミオとジュリエット』といった西欧の恋愛物語を読む。その後、視点を日本に移し、伊藤整『近代日本における『愛』の虚偽』の論点をおさえ、坪内逍遙『当世書生気質』や森鷗外『舞姫』に描かれた明治期の恋と恋愛観を検討する。

とこの大学であっても、この種のテーマをかかえる授業

なら、これらは「定番」の文献だろう。私の講義に新味があるとしたら、最後に『ムーンライト・シャドウ』を読むことだ。その際、私は学生に「これは恋愛小説か?」と敢えて問い、「Yes派」と「No派」に分けて議論させ、その議論を通じて講義全体の総まとめを行う。

問いへの答えはYesなのかNoなのか?詳細は授業で解説させていただくが、以下に記す私自身の個人的記憶は、その答えと無縁ではない。

24歳のとき、私は2年間勤めた会社を辞めた。自由になるはずだったのに、不安で身動きがとれなくなった。まるで海の底に沈められたかのような日々… そんなときに出会ったのが本書だった。『ムーンライト・シャドウ』を日本大学芸術学部の卒業制作として執筆したという、自分と同世代の新進作家に驚嘆するとともに、この作品が心に届けてくれた「重い酸素」のようなものを感じながら、私は自分に言い聞かせた。「今は潜水したままでもいい。耐えに耐え、いつの日かまた浮上する。」

国際教養学科 高塚 浩由樹



第四の消費 一つながりを生み出す社会へ

三浦 展 著 [朝日新聞出版]

国際総合政策学科 蓼沼 智行

我国の消費社会は、現在、新たな局面を迎えている。市場の成熟化、少子高齢化、情報化等に伴って物販中心の消費社会から付加価値・サービス中心の消費社会へとその性質は変化している。またその様相は、実に複雑でそれを紐解くのは極めて難解である。なぜならば、消費社会の歴史とその特質を紐解くには相当な時間が要されるからである。

だが、こうした難解な消費社会の有様を著者・三浦氏は、4つの段階に分類しマーケティング論と社会学の両観点から分かり易く解説している。すなわち、日本人の消費動向を4つの段階に分類し、時代区分（社会背景・人口動向・出生率、高齢者率・国民の価値観・消費の志向・消費のテーマ・消費の担い手等に区分）をすることでその消費の特質をより明確にし、読者への理解度を促している。加えて、臨機応変に時系列的に客観的データを活用したり具体例を援用

したりすることによって実に読者の心を惹きつけている。こうした創意工夫が施された解説を通じて読者の理解力は増し、知らず知らずのうちに消費社会の変化を見極める目を養うことができる、そのような一冊である。

周知のように、消費社会はどの時代においても常に変化している。厳密には国・地域によって様々であるし、年齢・性別・所得等の属性によっても当然、異なってくる。

しかし、こうした変化に目を向け柔軟に対応していくことが広く企業・組織では求められるようになってきているのも事実である。特に、近い将来、日本経済の原動力として実社会に羽ばたく学生諸君にとって極めて重要な視点となってくることは間違いないことであろう。そうした意味では、マーケティング論と社会学が融合した観点から体系的に分析、検証されたこの著作は、是非とも一読しておきたいお薦めの一冊といえる。



世界を、こんなふうに見てごらん

日高 敏隆 著 [集英社]

ビジネス教養学科 松井 洋子

日高先生は、昆虫少年から初志貫徹されて、大学で研究者として日本に動物行動学を最初に紹介した。先生の様々な研究やその成果をやさしく語られる著作や動物行動学の名著の翻訳は、すべての読者に感動を与えている。動物界をみながら、自分を読者はみつめることができ、人間は動物界の一員という視点から文化や環境問題を考えていくべきだと語られる言葉を素直に心の中に収めることが出来るだろう。

この一冊は、先生が集英社の読書情報誌「青春と読書」に2009年の1年間に書かれたエッセイと総合地球環境学研究所を退官されたときの講演録で構成されている。その語りは優しく、力強い。あとがきを書かれた今福先生が「どうするとものが見えてくるのか、見えるものとはどんなものか、そもそもものがわかるというのはどういうことか、などについて、これまでの常識を覆しつつ解き明かしてくれる。」と述べておられるように、短期大学での2年間をどうしようかと考えている学生には、大きな指針を与えてくれる内容ではないかと思われる。もちろん、学問研究をする私自身にも、

その姿勢を見直す一冊となった。

科学は本当に真理の追究かということについて大きな疑問を読者に投げかけている。人間は人間が作り出した概念の世界に生きている。つまりイリュージョンという色眼鏡を通してしかものが見えない。そこからの思い込みが「幽霊」となってきたことになるのだと先生は語る。

人間は動物界の一員であるという一例として動物界における競争原理は資本主義的であると先生はある対談で述べている。動物たちは彼ら全体の「種」ではなくてあくまで「自分自身の遺伝子を持った子孫」をできるだけたくさん残そうと一生懸命になるのだという。この足の引っ張り合いの繰り返しは資本主義経済の競争と共通しているし、そのほうが、経済は発展し、動物たちの「種」は環境が破壊されるときに滅びるが、シェア争いでは生き残り、安泰にいくのだそうだ。この一冊が日高ワールドに入る出発点になるように、是非手に取ってページをめくってもらいたい。



ねむり

村上 春樹 著 [新潮社]

食物栄養学科 太田 尚子

本小説は、覚醒が何日も延々と続いて、その長い時間に実にさまざまな気分を味わい、周囲の人に気づかれずに自由な発想と行動を起こす一人の家庭婦人のお話です。1990年に書かれた短編小説「眠り」のバージョンアップとして位置づけられています。

人は誰でも不意に眠れなくなる経験をする事やその可能性があり、信じられないほど長期に続く強い不安に駆られるものですが、眠れないことを逆手にとって（周囲の人よりも1.5倍の事ができると前向きにとらえて）、誰にも知られない時間を悠々と過ごす事ができればとても開放された気分になるでしょう。そんな時、人は普段は下意識の中にあり気づいていない心の底の自分の素直な思いに目を覚ますことがある

のです。著者はその辺りを伝えたいのだろーと思えます。学生の皆さんも原因は不明でも、将来眠れない体験をしたなら是非この小説のことを思い浮かべてみてください。きっとその眠れない時間が自分の内面を自覚する良い機会となるのではないのでしょうか。

更に著者は「あとがき」のなかで本書をイラストレーション付きで単行本化した経緯について次のように述べています。「ドイツのデモン社（もと美術書の出版社）がこの事を企画し、本の中に出てくるイラストはどれもとても新鮮で装丁も見事であり、本書が出来上がったことがとても嬉しい。」と。物語の内容に加えてそのような観点（イラストをも味わう）からも楽しんでいただければ一冊ではないでしょうか。

STUDENT'S VOICE

私と日本の縁

国際ビジネス情報学科 4年 周 利

私は中学校を卒業するまでずっと故郷で暮らしていたので、あまり遠い所に行ったことがありませんでした。海の向こう側に日本があることを小学校4年の頃に初めて知りました。それは四川省の友好都市の広島から「広島友好親善協会」が私の故郷である簡陽市の沱江河を訪問し、友好活動を通して一緒に木を植えたことがきっかけでした。友好活動の記念として桜と富士山の柄のハンカチをもらい、なんて美しい模様だろうと思うと同時に、日本はどのような国なのだろうと頭に思い浮かべていました。今、私が日本に留学していることを考えると、非常に不思議な気がします。

中学校を卒業後、同級生は進学したり出稼ぎに行ったり、それぞれ新たな道を歩んでいました。私は日本語が話せるようになりたかったので中国の専門学校に進学しました。学校で2年間ほど日本語を勉強していた日々は極めて充実していました。その学校には日本に留学したことのある先輩も何人かいて、私は興味津々で彼らから色々な留学の話を聞いているうちに、自分も留学したい気持ちを抱くようになりました。しかしすぐには留学せず、専門学校を卒業した後は上海で就職しました。仕事をしながら日本語の勉強を日課として続けているうちに、気づけば1年が経過していました。

2009年の春に日本に留学するチャンスが訪れてきました。その瞬間、私は感動して思わず涙で目が潤んでしまったのを覚えています。

夢と両親の期待を背負って日本で勉強していることは、私にとって非常に幸せなことです。留学している間は楽しいことも辛いことも共存していますが、これらはすべて自分の人生の糧になると思います。

大学内で私はよく図書館を勉強場所として利用しています。学習の施設も整っていますし、環境も静かで勉強が捗ります。多分図書館へよく通ってくるから、職員の方は私の顔を覚えているのでしょうか。「体に気をつけて

頑張ってね」と言われたこともあり、その一言がとても励みになりました。ますます図書館に親しみを感じて足を運んでいます。

図書館には様々な分野の書籍が置いてあります。新聞や雑誌、資格取得のための参考書など、色々な本を活用したおかげでたくさんの情報を得ることができました。例えば一番好きな雑誌は『週刊ダイヤモンド』です。この本を通し、現在の日本社会が抱えている問題や注目されている話題についてより詳しくなりました。初めて簿記3級の検定試験を受けた時も、簿記に関する本を参考に必死で勉強したから受かったのだと思います。

留学生の私はもっと流暢に自然な日本語が話せるようになりたくて、休日は日本語学に関する基礎知識をもっと得たいと思い勉強しています。日本語は勉強すればするほど難しいのですが、とても美しい言葉です。色々な言葉の表現を読んだり、聞いたりすることによって日本人の心と日本の文化を肌で感じる事ができて楽しいです。まだまだ日本語については多くの疑問があるので、日本語学の研究をするために大学院に進学し、将来は日中の架け橋となって自分の役割を果たせるような、日本語教師になりたいです。図書館で出会ったたくさんの方の本が、このような将来の夢に私を導いてくれました。

来年の春、私はもうすぐ日本大学国際関係学部を卒業します。日本に来て小学生の頃にももらったハンカチにあった富士山の麓の三島で、大自然と共に勉強できたことは本当に良かったと思います。



国際機関資料室から ● INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER



日・EUフレンドシップウィーク2013

「フランスとイタリアのツーリズム ～1920年代のヴィンテージ旅行広告展～」開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパデーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月9日(木)～5月31日(金)まで、図書館1階閲覧室及び国際機関資料室にて、「フランスとイタリアのツーリズム ～1920年代のヴィンテージ旅行広告展～」というテーマで展示会を開催しました。

ロジェ・ブローダーズを初めとするフランス人画家達が1920年代に描いた旅行用ポスターは、アールデコの個性的なデザインで広く愛されてきました。今回、そのうちの10点をピックアップしポスターとして展示すると共に、当館の



資料やデータベースを利用し、フランス・イタリア両国の観光政策についてまとめたものも併せて展示しました。

国際機関資料室のグループワーク・エリアでは、「フランス・イタリア映画鑑賞会」を、期間中計6回開催し、「ココ・アヴァン・

シャネル」や「ニューシネマパラダイス」、「アメリ」などの映画を、クッキーとアイ스티ーを添えて共に堪能していただきました。

また、恒例のクイズでは、展示資料に関連した問題を出題し、駐日欧州連合代表部から提供いただいたキティちゃんストラップやペンなどのEUグッズを景品としました。

今年は、メインの展示をヴィンテージのポスターにしたので、写真などのポスターとは一味違う雰囲気を楽しんでもらえたのではないかと思います。次回も、皆さんが知らないヨーロッパの一面を紹介できるイベントを企画し、多くの方にEUやEU加盟国に興味を持っていただけるよう努力したいと思います。



日本大学国際関係学部図書館ニュース

BIBLIOTHECA

第9号

通巻第154号

発行日／2013年10月1日

編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会<http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>